『稚児今参り物語』成立私考―和歌受容の側面から―

片岡麻実

一、『稚児今参り物語』研究史概括

『稚児今参り物語』は室町後期に成立した物語で、比叡山の稚児が垣間見した内大臣の姫君に懸想し、女装をして姫君の女房になるという稚児物として珍しい趣向の物語である。

かつて市古貞次が古典文庫に翻刻して以来（市古貞次『未刊中世小説一』古典文庫、一九五四年）、鈴木弘道が「とりかへばや物語の影響作品」（『平安末期物語についての研究』赤尾照文堂、一九七一年）で奈良絵本『ちごいま』の趣向・文章等についてふれた。だが二〇〇五年に染谷裕子の「絵巻における本文と画中詞比較の試み―『稚児今参り物語』の場合」が発表されるまで、「稚児今参り物語」単独の研究論文はなかった(1)。

染谷は美濃部重克による『稚児今参り物語』絵巻についての指摘(2)を踏まえ、国語学者の立場から、画中詞と絵巻本文の会話文に見られる表現の違い、例えば「侍り」と「候」の使い分け等について考察している。

中世王朝物語（擬古物語）は王朝物語、特に『源氏物語』の影響を受けて、さらにその流れからお伽草子が発生したとされている。そのため主人公の稚児が女装する『稚児今参り物語』は「擬古物語、特に『とりかへばや物語』を模倣した作品」とする鈴木弘道の評価は正しい。

『お伽草子辞典』の「稚児いま参り」の項で、濱中修が『とりかへばや物語』「秋の夜長物語」からの影響に加えて、「花世の姫」などの姥皮型モチーフとの関連、「貴船の本地」「御曹子島渡」との類似を指摘している(3)。同辞典「天狗草紙」の項では、徳田和夫がお伽草子「是害坊絵巻」「稚児今参り」「天狗の内裏」等における天狗説話を背景から、「天狗草紙」の重要性を挙げている(4)。

岩瀬文庫蔵・奈良絵本『ちごいま』が『室町時代物語大成　第九』に翻刻が収録され、『稚児今参り絵巻』は『御伽草子絵巻』に翻刻と絵が掲載された。二〇一一年三月には（翻刻・注釈）阿部泰郎監修、末松美咲編「『ちごいま』物語絵巻・絵本研究資料集」、二〇一二年には（翻刻・注釈）阿部泰郎監修・末松美咲編「『ちごいま』全注釈」が名古屋大学文学研究科比較人文学研究室から発表された(5)。近年では『稚児今参り物語』（ちごいま）の講演・口頭発表

等も行われるようになった（6）。

しかし「稚児今参り物語」の先行研究は、絵巻の画中詞と本文の関係について述べられる事が主であった。さらに奈良絵本『ちごいま』の構想・比較・成立論に関しての先行研究は少数であった。その要因として鈴木前掲書において、『とりかへばや物語』や『秋の夜長物語』の趣向を模倣した作品と紹介された事が影響を与えた可能性がある。第二に『稚児今参り物語』に注釈が付けられたのは、阿部前掲書まで待たねばならなかったからという事情が考えられる。

このような状況のためか、『稚児今参り物語』の構想・成立に関する本格的な論考は他のお伽草子に比べるとなされてこなかった。そこで小論では、和歌受容という観点から作品成立の事情・背景を考えてみたい。

二、『時慶卿記』と『ちごいま』

絵巻と奈良絵本との相違点で特に筆者が注目したのは、以下の五点である。

①稚児の髪型の相違

②姫君が山中をさまよう場面で本文には川がないと書かれているが奈良絵本の挿絵には川が描かれている点

③尼天狗は絵巻では天狗の姿で、奈良絵本では人間として描かれている点

④絵巻とは異なり、奈良絵本では襖の絵が「三日月」と四つの点のモチーフで描かれている点

⑤奈良絵本の最後に稚児は「藤原北家」の流れをくむ人物であることが明かされる点

①から④までは別稿にて述べることとし、本論では⑤について検討する。

『稚児今参り物語絵巻』は室町後期、奈良絵本『ちごいま』は江戸初期の写しとされている。成立した時期については、市古貞次が『時慶卿記』慶長十年条に「三月四日　児今参ノ双紙初而一見候」と記載されている事を指摘した（7）。「双紙」と記録されていることから、冊子本であったことがわかる。したがって慶長十年（一六〇五年）以前に奈良絵本『ちごいま』が成立していたと考えられよう。

時慶が『児今参ノ双紙』を目にしていた事から、公家や宮中に出入りする連歌師、僧侶等が奈良絵本の改作者、および読者であった可能性がある。

西洞院家について村山修一は以下のように概説している。

時慶の西洞院は桓武平氏である。桓武天皇皇子葛原親王の子高棟王に始まり、高棟王が大納言であったほか、子孫は平安時代を通じてそれ以上の地位に上がるものはなかったが、時慶の時代に至り長男時忠は権大納言、次男親宗は中納言、長女時子は平清盛の室、次女滋子は後白河天皇皇后、三女は平宗盛の室、四女は重盛の室といった具合に、俄に栄華を誇る有様となったものの、清盛一族の没落後はまた元の下層公家の地位に戻った。（中略）永禄九年（一五六六）四月十九日時当（もと時秀）死

去によって後嗣が絶え、時慶が他家より入って再興することとなり、その子孫によって江戸時代西洞院家は存続した(8)。

その後、叔父の飛鳥井雅春の養子となり、桓武平氏の流れをくむ西洞院家の再興を行った。飛鳥井家の祖・飛鳥井雅経は藤原北家の流れをくむ人物である。

時慶は医学の心得があり、和歌に精進したほか、吉田唯一神道の真髄である十八神道の祭儀を伝授された。(9)。

『時慶卿記』には時慶が閲覧した古典籍名が記載されている。村山修一が主な古典籍をまとめているので以下に記す(10)。

【和歌・連歌】

朗詠集　八代集　古今集　新古今集　後撰集　千載集　新千載集　古今伝授　拾遺愚草　顕注密勘　詠歌大概（定家）　百人一首　公任集　亜塊集　袖中抄　至宝抄　建保百首　悦目抄　井蛙抄（頓阿）　手尓葉大概抄（宗祇）　梁塵愚案抄（一条兼良）　名所方角和歌抄　詠歌大概聞書（細川幽斎）　新古秘説抄　連歌新式

【文芸】

源氏物語　花鳥余情（一条兼良）　河海抄（四辻善成）　狭衣物語　大和物語　伊勢物語　土佐日記　酒天童子　紀伊国鏡巻物語　郎詠集　月光　花満　今日は三人僧　富士人穴　岩屋瀧口　白氏文集　野槌　曽我物語

【歴史・政治・宗教】

平家物語　神皇正統記　水鏡　大鏡　日本書紀　新撰姓氏録　応仁記　和漢合運図　延喜式　公家補任　貞永式目　元享釈書　九条右丞相遺誡　公事根源　朝野群載　五代帝王物語　本朝文粋　唯一神道名法要集　決疑抄

【漢籍類】

古文孝経　四書（大学・中庸・論語・孟子）　老子　荘子　尚書　孝子経　古文真宝　蒙求　周泰行記　遊仙窟　説文解字　北礀全集　碧厳録　皇朝類苑

【その他】

草人木　樵談治要　和名抄　拾介抄　年代記

時慶は細川幽斎など文学を嗜む仲間から本の貸し借りをしていた点、『稚児今参り物語』の写本が少ない点から、奈良絵本『ちごいま』を制作した人物は時慶と交流がある人物であった可能性が想定される。この想定をひとまず作業仮説とし、その上で作中和歌の詠出手法と、この想定とが綺麗につながるかどうか、という観点から、考察を進めていくこととする。

三、鎌倉時代物語との類似

鈴木弘道は『平安末期物語についての研究』において、『ちごいま』と『とりかへばや物語』には本歌を同じくしたと考えられる引歌を指摘している。

例えば『ちごいま』の「せきやりたまはぬ御けしきを見たてまつりおきていでける心ち、たましゐはみな御そでのうちにとゞめぬる

心してかなしさながら、さてしもあるべきならねば(11)」は『古今集』巻第十八　雑歌下にある「あかざりし袖の中にや入りにけむ我がたましひのなき心地する」を引歌とすべきとしている(12)。東宮への入内を控えた姫君が懐姫した後、稚児に帰山の催促があり、姫君と別れを惜しむ場面である。

『古今集』巻第十八　雑歌下にある「世のうきめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ」は、『ちごいま』の稚児が天狗に誘拐された後、稚児の乳母が行方を探す場面で「山ちの、ほたしたる人もなければ(13)」と引かれている。前掲の和歌は『とりかへばや物語』でも複数箇所に引かれている(14)。

鈴木は「この歌を下に持って書いたらしい文が『とりかへばや物語』以外にも　見受けられるから、ちごいまの典拠は俄には断定できない(15)」としている。鈴木が前掲書で指摘しているように『とりかへばや物語』『ちごいま』には類似点が見られると考えるのが良いだろう。その点を踏まえた上で、作品成立の事情・背景を明らかにするため、『稚児今参り』の本歌取りについて検討を加える。

『稚児今参り物語絵巻』に

そのままに　こころは空に　あくかれて　みしおもかけそ　身をも離れぬ(16)

がある。

この和歌の類歌として『風葉和歌集』一〇〇七番詠に

御志ありてのたまはせける女の、あらぬさまになりにければ言はで忍ぶの嵯峨の院御歌

忘ればやと憂きに幾度思へどもなほ面影の身をも離れぬ(17)

がある。

前掲の和歌は『いはでしのぶ』のもので、鎌倉時代物語である。愛情をもっていた女性が別な男性と結ばれることになったが、愛しい女性の面影を忘れることはできないという歌だ。「身をも離れぬ」の語句が使われた和歌は『新編国歌大観』に全部で十五首ある。「面影」かつ「身をも離れぬ」の組み合わせは一首のみであった。

ただし、散逸物語『すまひ（相撲）』にも

相撲の節過ぎて、筑紫に帰り下らんとて、すけの中将のもとにまかりてよめる　相撲の修理亮

数ならぬ身こそ行くとも従はぬ心は君に立ちも離れじ

返し　右中将

とどむとも心は見えぬものなればなほ面影ぞ恋しかるべき(18)

とあり、類似した表現が見られる。

散逸物語『すまひ（相撲）』は『風葉和歌集』に収録された十首の歌のみ現存する。宮崎裕子は「散逸物語『すまひ（相撲）』復元考」で以下の復元案をまとめている。

筑紫の地方官であった修理亮は、相撲人として参加した相撲節を契機に右中将と親密な仲になる。任国に戻る修理亮は右中将のもとへ暇乞いに訪れ、互いに別れを惜しむ。修理亮が再び相撲人として上京する来秋の再会を期して二人はわかれた。筑紫へ下向する途中、修理亮は海辺で右中将を思い出し、恋い慕う。その後、不本意ながらも土佐国室戸に住むことになった修理亮

は、都の右中将を偲んで春を過ごし、自身の不遇を託って内記の聖に慰められていた。最終的に修理亮は都に戻り、京官である「修理亮」に任じられる(19)。

一方、山田和則は「散逸物語『すまひ（相撲）』復元試論」において、

相撲節のために上京した修理亮は右中将と親しくなるが、相撲節を終えて筑紫に帰る。その帰途に何らかのトラブルに巻き込まれ、室戸に暮らすことになる。修理亮は都を思うものの状況は叶うことなく、室戸で生涯を閉じる(20)。

とし、流離の物語として解釈している。この作品は成人男性による同性愛の物語と考えられるが、山田は

前述したように『すまひ』は『狭衣』の飛鳥井女君の物語の影響を受けているらしく、修理亮を女に見立てるならば、女君が難を受け流離する構造は継子物語などにもよく見られるものだと言えよう。逆に右中将を女に見立てるならば、右中将と離れて流離する修理亮の心情は、流離の原因は別としても、須磨における光源氏の紫の上への想いやりと共通するだろう。たまたまそのペアが男同士というだけで、男女の恋愛物語と大きく変わることはない(21)。

と結論づけた。

作品が散逸しているため、『すまひ（相撲）』の修理亮が再び京の都に戻ることができたのか、流離の原因は何だったのか等は推測の域を出ないが、山田が指摘したように王朝物語の男女の恋愛に変換して解釈することも可能であろう。性の逸脱や流離という趣向の類似から、『稚児今参り物語絵巻』の作者が稚児の和歌を制作する際に、散逸物語『すまひ（相撲）』の修理亮と右中将のやり取りを念頭に置いていた可能性も浮上する。『稚児今参り物語』が鎌倉時代物語の影響を受け、その流れを受け継いで物語草子化された経緯が和歌にも現れているのであろう。

四、離別の和歌

『稚児今参り物語』では物語の中間部に稚児と姫君が別れの和歌を読む場面がある。

さてしも、あるへきならねは、あけなは、いてなんとするに、しきりに、とりもをとつれわたり侍へれは、あやにくなる心ちして、くらふ山に、やとりもとらまほし

①かりそめの　わかれとかつは　おもへとも　このあかつきやかきりなるらん

ひめ君

②かへりこん　いのちしらねは　かりそめの　わかれとたにもわれは思わす(22)

別れを惜しむ稚児と姫君の和歌①②は『稚児今参り物語絵巻』奈良絵本『ちごいま』の双方に含まれる歌である。両首が奈良絵本に残されたという事は、奈良絵本の作者が削除してはならない歌と認識していた事がうかがえる。その点に関して三角洋一は、次のように

述べている。

㉘あふこともつゆのいのちももろともに　こよひばかりやかぎりなるらん

『平家物語』巻十、内裏女房

㉙あられふりさゆる霜夜にをきわかれ　こよひばかりやかぎりなるらん

『忍び音』5

㉚かりそめのわかれとかつはおもへども　このあかつきやかぎりなるらん

『稚児今参り』3

㉘は一の谷の合戦で捕らえられた平重衡が内裏女房との最後の別れに際して詠んだ歌で、『拾遺集』別・三一二「別れてはあはむあはじぞ定めなきこのゆふぐれや限りなるらん」を本歌としている。この『拾遺集』歌は別れの心細さと再会の期しがたさをうたって、世のことわりに聞こえるからであろうか、㉙の、政略結婚させられた男君をその新妻のもとに送り出す女君の歌にあっても、また㉚の、女装して今参りの女房となり女君に契りを結んだ稚児が、登山のため女君としばし別れねばならぬ折に詠んだ歌にあっても、本歌として利用されている。それなら、㉘㉙㉚の三者間に影響関係はないかと言うと、少なくとも下の句の一致する㉘㉙の間にはなんらかの影響を考えたほうがよく、おそらく　㉘から㉙へという方向を見ることができるのではなかろうか。あらためて、『平家』の歌話の成り立ちと『平家』そのものの流布と言った問題が生じてくるように思う(23)。

「かりそめの」「かへりこん」の両首が奈良絵本に残された理由として、『平家物語』の和歌の影響はありえるのか。他の物語や和歌からの影響はあるのか、検討をする。

『風葉和歌集』所収『水無瀬川』の和歌に

石山にこもらむとて出で侍りける暁、女に　みなせ川の左大臣

③今来むと思ふものから心をばとめてぞ出づる有明の月(五四五)

返し　入道一品の宮の中納言

④帰り来むほどをも待たず消え果てばこの暁や限りなるべき（五四六）

という二首がある(24)。

『水無瀬川』は鎌倉期成立の散逸物語である。『風葉和歌集』に十一首入首している。散逸物語のため詳しい内容は不明であるが、忍ぶ恋・東宮妃になる姫君の存在という点では『稚児今参り物語』と類似点がある。『水無瀬川』五四六番詠との類似を踏まえると、三角が『稚児今参り物語絵巻』と『平家物語』の影響関係について言及を避けているのは適切な判断であったと思われる(25)。

確かに『平家物語』の「こよひばかりやかぎりなるらん」と『稚児今参り』の「このあかつきやかぎりなるらん」は類似している。加えて『水無瀬川』「帰り来むほどをも待たず消え果てばこの暁や限りなるべき」から本歌取りした可能性も否定できない。ただし散逸物語『水無瀬川』が当時どの程度流布していたのか、という点を

考えると、『平家物語』巻十・内裏女房の和歌を本歌とした可能性のほうが高いだろう。

①②の歌に引き続き、稚児と姫君は別れを惜しむ。しかし童に夜が明けるからとせかされ、泣く泣く以下の歌を詠む。

さながら、たましゐは、なく〳〵　たちいてゝ、おのかきぬくになる程、いはんかたなく、たえがたし

⑤きぬきぬの　わかれはおなし　なみたにて　なをたか袖かぬれまさるらん

ひめきみ

⑥たかそての　たくいもあらし　なみた川　うき名を流す　けさのわかれに(26)

⑤⑥の和歌はどちらも奈良絵本のみに存在する和歌で、新たに挿入されたものである。この場面では『平家物語』本三位中将重衡の歌、「涙河うき名を流す身なりともいま一たびの逢せともがな」を踏まえている。この歌は『平家物語』の覚一本では巻十・内裏女房、延慶本では第五末（巻十）・重衡卿内裏迎女房事、『源平盛衰記』では巻三十九・友時参衡許・重衡迎え内裏女房に見える。一の谷の戦いで捕虜になった平重衡が、都の中をひきまわされて御堂に監禁された際、かつて恋人の内裏女房（民部卿入道親範の娘）と再会し、和歌をやり取りする場面である。

「わが心におこッてはやかねども、悪党おほかりしかば、手ゝに火をはなッて、おほくの堂塔を焼きはらふ。末のつゆ、本のしづくとなるなれば、われ一人が罪にこそならんずらめと言ひしが。げにさとおぼゆる」とかきくどき、さめ〴〵となかれける。（中略）「三位中将殿より御文の候」と申せば、年ごろはは ぢて見えたまはぬ女房の、せめての思ひのあまりにや、「いづらや、いづら」とてはしり出て、手づから文をとッて見たまへば、西国よりとられてありしありさま、けふあすとも知らぬ身のゆくへなゝど、こま〴〵と書きつゞけ、おくには一首の歌ぞ有りける。

涙河うき名を流す身なりともいま一たびのあふせともがな(27)

『稚児今参り』の稚児は、比叡山に病気療養と嘘をつき、女装をして内大臣家の女房になった。稚児は入内が決まっている姫君と関係を持ち、懐妊させる。稚児は世の常ならぬ行為を行い、「罪」を背負うことになった。自らの過失によって、恋人との別れをもたらした点で重衡と類似している。「なみたかは」かつ「うき名をながす」を含む歌は平家物語以外には存在しない。それにもかかわらず、奈良絵本『ちごいま』はその句をそのまま借用している。同じ和歌から取られた例として「今ははや　うき名ながして　涙川　せくと思ひし　袖もかひなし」（『飛月集』一一四、顕恋、為忠）がある。「うき名ながして」かつ「涙川」を含む和歌は『飛月集』のみに存在する。

次に掲げる奈良絵本『ちごいま』八首目の和歌は絵巻になく、奈良絵本のみに存在する。

『ちごいま』

しのはすは　とはまし物を　人しれす　わかれのうちの　またわかれちを（28）

『飛月集』

しのばずは　人にとはまし　現とも　夢ともわかぬ　けさのわかれぢ（後朝恋・一〇五）（29）

奈良絵本にのみ存在する前掲の和歌は、二条祐守・作『飛月集』一〇五番詠と類似している。「しのばずは」かつ「わかれぢ」の句を含むのは『飛月集』一〇五番詠のみであった。ただし『飛月集』を目にする事ができたのは限られた人間だったろうから、たまたま一致した可能性も否定できない。

この『飛月集』は、正中二年（一三二五）七月十二日、八月二十九日、九月十一日、十月二十五日の四回の月次歌会の作で、それぞれ詠三首和歌と続歌三十首が収められており、作者には二条家の為世、為定、為忠、為冬、法印隆淵、鴨祐夏、祐光、祐躬、邦祐、祐守、らがいる（30）。『飛月集』の和歌には『平家物語』と類似した和歌がいくつか存在することから、作者の平家好みが反映されていた可能性がある。

『飛月集』を享受できた人物はごく限られていただろうから、奈良絵本『ちごいま』と『飛月集』の和歌は、どちらも重衡の和歌を本歌にしていると考えるのが自然であろう。その結果、『飛月集』の和歌と奈良絵本『ちごいま』の和歌が類似したと考えられる。

五、「みくつ」が語るもの

重衡の「涙河うき名を流す身なりともいま一たびのあふせともがな」は、三角が指摘したように①の和歌が平家取りしている点を踏まえると、⑥の和歌に投影されている可能性は高いのではないか。絵巻にはない⑤⑥の和歌が奈良絵本に挿入されたのは、重衡の歌を本歌にする事によって『平家』の悲しい別れの場面を連想させようとした奈良絵本作者の意図が推測される。それでは『平家物語』の涙川の歌は、なぜ姫君によって本歌取りされる必要があったのだろうか。

内裏女房は重衡の手紙に書きつけられた「涙川」の歌に以下の歌を返した。

君ゆゑにわれもうき名を流すともそこのみくづとともに成りなむ（31）

「川底の水屑になる」は、本来身投げして死ぬ場合に使う。しかし、ここでは前の歌の「川」の縁で言ったもので、ただ死ぬ意を示している。この女房の歌は奈良絵本『ちごいま』の他の箇所にも引歌されている。

奈良絵本『ちごいま』において、姫君が内大臣邸で稚児のもとへ逃げようと決意する際、

そこのみくつとも、なりなはやと、おほししつめと、うきたるなをや、なかさんとなきあとさへ、又うしろめたくおほしわつらふ、心のうちの、くるしさは、たかつらさとも、おもひわかれぬ、心地して（32）

と考え、内裏女房の歌を引いている。

この「君ゆゑに」の歌に出てくる「底の水屑」は、前の歌の「涙川」を受けて使用された措辞で、「川に身を投げる」の意ではなく、単に「死ぬ」意を示していた。しかし『ちごいま』の姫君が山中をさ迷う場面では次のように書かれている。

うすきぬはかり、いとしとけなけに、ひきかついて、いて給へと、ならはぬ事なれは、いつかたへ行くへしとも、おほえす、かはある、あたりをも、しらねは、たちわつらひておはするに、（中略）人やみん、といとはしたなくて、木のもとに、たちかくれて、おはすれば、（中略）みをすつべきところも、おほえねは、しらくもの、こえぬ山もなく、（中略）もし、水あるところもやと、しつみ給はん所を、たつぬれと、山の井の、あさきちきりの、すへたにもなし、かわあらん、ふかき山中に、日くらし、たとりありき給へは、やう〳〵暮行くまゝに（33）、

おそらく奈良絵本の作者は、内裏女房の和歌の「底の水屑」を「入水する」の意で捉えていたのだろう。そのため姫君は山中で身を投げるための川を求めて彷徨うことになるのではないか。

『稚児今参り物語絵巻』は⑤⑥の和歌がないが、内裏女房の和歌の「底の水屑」は、絵巻物の散文に引かれている。

日かすにそえては、御はらも、ふくらかになり給へば、たた、うちふしてのみそ、をはしましける、そこのみくつとも、なりなんやとは、おほせとも、ひまもなけれは、いてたまはんことも、かなはぬに（34）、

『木幡の時雨』の中の君が川に身を投げようとする場面にも、「底の水屑」「底の藻屑」の表現が使われている。

女郎花の生絹の単に袴ばかりを着給ひて、歩みいで給ふ心のうちいとかなし。「宮たちの御行く末も、我さへ亡くなりなば、ただ人にてや果て給はまし」と思すがいとかなし。（中略）今宵はことに七月七日なれば、七夕の契りもかつはうらやましくて、

七夕の逢ふ瀬はよそになし果てて底の藻屑となるぞかなしき

と思ひ続けて、月のかたぶくまで泣きおはするに、ここに舟にて漁りする人なん船さしのぼる。（中略）「さても心憂かりける御心かな。いまひとたび同じ心に逢ひ見んとは思し召さで、などや浮きたる波に漂ひ給ひけるぞ」と恨み給へば、「憂き身のおき所侍らで、底の水屑とならんと思ひたち侍りしを、心憂くも」との給ふぞ（35）、

『木幡の時雨』の中の君は中納言の乳母子・兵衛の佐から意にそまぬ求婚をされ、屋敷を抜けだして川に身を投げようとした。この場面は『平家物語』の重衛と内裏女房の和歌の影響が見える。そして『ちごいま』の姫君が屋敷を抜け出し、身を投げる川を探して山中を流離する部分にも類似が見られることに注意したい。

『稚児今参り物語』に影響を与えたとされる『とりかへばや物語』の女君は、自分が産んだ子を置き去りにする事によって、宇治の宰相の中将から逃げ出すことができた。彼女は男装して帝に仕えていたという経験があり、その結果として一人で逃走する決意ができた

と考えられる。女君に逃げられて嘆き悲しむだけの宰相の中将とは対照的に描かれている。

一方『ちごいま』の場合、①⑤で稚児がただ嘆く歌を詠むのに対して、姫君は②⑥でより能動的に自分の気持ちを示している。鈴木弘道は『稚児今参り物語』の稚児と姫君の関係が、『とりかへばや物語』の女君と宰相の中将の関係に類似していると述べている(35)。和歌の面でもそのことが裏付けられる。

『とりかへばや』の女君は、ジェンダーにおいて男性だが、実際の性別は女性である。そのため彼女は男装して世を謀った罪と、母でありながら子を置き去りにし、捨てた罪を負う。『稚児今参り物語』の場合、東宮への入内を控えた姫君は不義の子を身ごもり、発覚してはならない秘密を抱えた。京で稚児が天狗にさらわれた噂を聞き、姫君は臨月を控えた身にもかかわらず、一人で逃亡することを決意する。この場面は鈴木が指摘したように『とりかへばや物語』の女君が宇治から一人で逃亡する場面を連想させる(36)。

『木幡の時雨』では「底の水屑」と共に「底の藻屑」という言葉が使われている。『日本国語大辞典　第十八巻』(小学館)の「みくずとなる」の項では「水中で死ぬ。溺死する意のたとえ」として定義されていた。「藻屑」は「海中にある藻などの屑。またそのようにはかないもの」という意であることから「もくずとなる」は「海で死ぬことのたとえに言う」と定義されている。

しかし『新編国歌大観』で「底の水屑」および「底の藻屑」の使用例を調べた結果、「水屑」は「川および海以外の水中」を示す語と共に使われ、海と共には使われていなかった。そして「藻屑」は、共に使用される語を特に限定していなかった(37)。

『稚児今参り物語』の姫君は山中で「身を投げるための川」を捜してさまよう。その場面を表現する語彙として使われたのが「底の水屑」である。川に身を投げるモチーフは「稚児ヶ淵伝説」をはじめとして「稚児物」にしばしば登場する。王朝物語においても、『源氏物語』の浮舟や『狭衣物語』の飛鳥井女君のように姫君が入水する例は複数ある。「底の水屑」という観点だけでは、『稚児今参り物語絵巻』の作者が『平家物語』を意識して執筆したとは言いきれない。

しかし奈良絵本『ちごいま』の作者は、離別の場面で『平家物語』から二首、本歌取りをした。どちらの和歌も巻十・内裏女房から取っている。③の和歌の本歌は、先ほど引用したように三角洋一が『平家物語』から、と指摘している。意図的に「平家取り」がなされたとするのが適当であろう。

六、平家物語の女君とちごいま

奈良絵本『ちごいま』で追加された描写に留意すべきすべき点がある。稚児の乳母が行方不明の稚児のために祈る場面では、

たゝ、このちこのゆくゑ、今一たひ、きかせ給ひて、この世にて、あはせ給へ、又なきかすにも、なりたらは、はやく、おしからぬいのちをめして、ひとつはちすの

つゆのちきりを、むすはせて、たはせ給へと、あけくれ、いのりけるに

れいの、よのおこなひに、をきて、ほんそんに、むかひたてまつりて、なく〳〵、くわこゆうれい、とんせうほたいと、申ありけり(38)

と、描写されている。

これは『平家物語』灌頂の巻の、

はるかに御覧じおくらせ給ひて、還御もやう〳〵のびさせ給ひければ、御本尊にむかひ奉り、「先帝聖霊、一門亡魂、成等正覚、頓証菩提」と、なく〳〵いのらせ給ひけり。(中略)西にむかひ手をあわせ、「過去聖霊、一仏浄土へ」と祈らせ給ふこそ悲しけれ(39)。

を意識していることが伺われる。『ちごいま』では稚児の乳母が行方不明になった稚児の身を案じ、建礼門院と類似した句を唱えている。奈良絵本『ちごいま』の作者が稚児に安徳天皇のイメージを重ねあわせて描写した可能性があるのかもしれない。

建礼門院は灌頂巻・女院出家において

女房達さのみたけく、二位殿・越前の三位のうへのやうに、水の底にも沈み給はねば、武士のあらけなきにとらはれて、旧里にかへり、わかきも老いたるもさまをかへ、かたちをやつし、あるにもあられぬありさまにてぞ、思ひもかけぬ谷の底、岩のはざまにあかし暮らし給ひける(40)。

と、越前の三位通盛の北の方・小宰相を例に挙げている。

巻第九・小宰相投身には、

昔より男におくるゝたぐひおほしといへども、さまをかふるは常のならひ、身を投ぐるまでは有りがたきためし也。忠臣は二君につかへず、貞女は二夫にまみえずとも、かやうの事をや申べき(41)。

とある。『平家物語』の女性の中で実際に身を投げた一人が、通盛の北の方・小宰相である。

それでは「君ゆゑにわれもうき名をながすともそこのみくづとともになりなむ」と詠んだ内裏女房の場合はどうか。彼女の恋人・重衡は法然に会い、奈良炎上の罪を認め、悪人の後生が助かる方法を問う。そしてその後、彼は懺悔と念仏を唱えながら斬られた。「悪人往生」したのである(42)。

和歌では「底の水屑」と詠んだが、重衡の死後、内裏女房は出家をし、重衡の罪を浄化、鎮魂する巫女的役割を果たした。加えて自らの往生も祈っている。恋人の罪を浄化するという点では、『稚児今参り物語』の姫君と共通する。そして建礼門院も灌頂の巻において出家し、安徳天皇と平家一門の供養を行った。

以上のことを踏まえると、奈良絵本『ちごいま』の作者が『平家物語』の内裏女房の逸話や灌頂の巻から引用したのは、姫君が稚児の罪を浄化する存在であることを読者に示唆したかったのだろう。

『稚児今参り物語』の尼天狗は仏道に励み、自ら犠牲になることで稚児と姫君の命を救った。岡見正雄は「尼天狗」が応永本『平家物語』第二本「法王御灌頂事」に登場していることを指摘した。

「アマさへ念仏申者ヲ妨ケテ嘲リナムトスル者必ス死レハ天狗道ニ堕ト云ヘリ」とも、「八宗ノ智者ニテ天魔トナルカ故ニ是ヲハ天狗ト申ナリ」ともあり、尼天狗と法師天狗とがあることを述べている(43)。

女性の天狗は珍しいことから、『稚児今参り物語』の作者は『平家物語』を意識した上で、尼天狗を創作したのではなかったか。そして『稚児今参り物語』は稚児物にもかかわらず、罪を負い、浄化する役割が稚児から姫君と尼天狗に変えられている点がユニークである。徳田が指摘したように『稚児今参り物語』は、『天狗草紙』等、天狗説話と仏教の関連からも検証する必要があるだろう。

七、おわりに

『稚児今参り物語絵巻』と『ちごいま』の本歌は、『とりかへばや物語』の他に散逸物語『水無瀬川』、散逸物語『すまひ(相撲)』、『平家物語』『木幡の時雨』の影響を否定できないことが判明した。安土桃山時代から江戸初期にこれらの古典籍を読むことができた人物は限定されていた。

奈良絵本『ちごいま』には、

このちこと申は、もとのねさし、あたならす、きたのふちなみの御するゑにて、おはすませと

ちゝはゝ、なくなり給ひて、めのとはかりかそてたたりしを、やまのそうしゃう、いとけなくより、御身をさらぬかけにてありしに(44)

と加筆され、主人公の稚児は「藤原北家」の流れをくむ人物である要素が追加されている。

『稚児今参ノ双紙』と日記に記載した西洞院時慶は藤原北家の流れをくむ飛鳥井家出身であった。「児今参ノ双紙初而一見候」と書いていることから時慶が成立・享受に深く関わっていたかと考えられるが、時慶にゆかりのある人物が写本を保有していたのは間違いないだろう。そして時慶の交友関係がある人物の中に奈良絵本の作者が存在する可能性が想定できる。

『稚児今参ノ双紙』を目にした時慶が、藤原北家の流れをくむ飛鳥井家から桓武平氏の流れをくむ西洞院家に入って再興した事を踏まえると、奈良絵本『ちごいま』の作者は『稚児今参り物語』絵巻に較べて『平家物語』の影響をより色濃くし、当時の読者により迎えられるような趣向に改作した可能性も考えられる。

『ちごいま』を稚児物として考えるならば、稚児が入水をするのが自然なように思われる。なぜ姫君が入水しようとしたのか。その点に関しては、『秋の夜長物語』稚児・梅若の入水等を題材に別稿にて検討した(45)。その際、尼天狗の兜率天往生において『我が身にたどる姫君』との類似点が複数見られた。『我が身にたどる姫君』の成立は、九条家との関係が検討されており(46)、九条家が写本の一つを保有していた(47)。時慶が目にした『児今参双紙』の成立に九条家の人間が関わっていた可能性も想定できるだろう。

今回の成立私考では、奈良絵本『ちごいま』の写本を「時慶にゆ

かりのある人物が写本を保有していた」という作業仮説をたてた。市古貞次が「中世小説の作者」で指摘したように、作者名が明記されている「筆結の物語」を除き(48)、大半のお伽草子は作者を特定できない。そのため今回の検証は推定の粋を出ないが、散逸物語『すまひ（相撲）』や『我が身にたどる姫君』など少数が閲覧したであろう物語との類似点が見られた。

奈良絵本『ちごいま』の最後は、「此の物かたりを、御らんする、ともからは、よく〳〵、ひすへし〳〵(49)」と終えられている。『我が身にたどる姫君』は九条家と縁があり、『飛月集』は二条家に縁がある。慶長四年には二条昭実が秀吉の側室だった三の丸を娶り、慶長九年に九条幸家は江の娘・豊臣完子と婚姻した。奈良絵本『ちごいま』が「嫁入り本」として制作されたならば、時慶周辺の人物の婚姻を鍵に、奈良絵本『ちごいま』成立範囲を狭めていくことも可能ではないか。

以上、「和歌の詠出技法」という観点から趣向・表現などの面を中心に、『稚児今参り物語』の創作と作者像にかかわりがありそうな事例をいくつか挙げた。『稚児今参り物語』における『平家物語』と王朝物語の受容には、また新しい観点からの評価が可能であると考えており、後考を用意したい。

【注】

（1）染谷裕子「絵巻における本文と画中詞比較の試み－『稚児今参り物語』の場合」（「語文」第一二一号　日本大学国文学会　二〇〇五・三）。

（2）美濃部重克「御伽草子　表現の仕組み－絵と画中詞－」（『中世伝承文学の諸相』和泉書院、一九八八年）。美濃部は「本文によっても、絵と画中詞だけを辿ることによっても理解できる」絵巻である点、「本文と絵画の領分とによって物語が二重に表現されている点、本文中の会話文は「侍」、画中詞は「候」という顕著な傾向がある点を指摘した。

（3）徳田和夫・編『お伽草子辞典』（東京堂出版、二〇〇二年）三三八～三三九頁を参照。

（4）前掲書三五九ページを参照。

（5）（翻刻・注釈）阿部泰郎監修、末松美咲編『『ちごいま』物語絵巻・絵本研究資料集」名古屋大学文学研究科比較人文学研究室二〇一二年三月。（翻刻・注釈）阿部泰郎監修・末松美咲編『『ちごいま』全注釈』（「名古屋大学比較人文学研究年報（別冊）」所収二〇一二年三月。小論執筆時点では入手できなかった。（http://women.rois.ac.jp/?active_action=cvclient_view_main_init&block_id=86&display_type=cv&cvid=atsuko.h&type=paper&page=4&num=5）がある。

（6）絵入り本　研究集会　二〇一一・九において、慶應義塾大学絵入り本プロジェクトと名古屋大学、西尾市岩瀬文庫との共催で阿

部泰郎による「『ちごいま』と稚児物語の世界」、名古屋大学文学研究科による「『ちごいま』の総合的研究」が発表された。(http://www.eiri.keio.ac.jp/entry/120.html)。日本文学協会の第二一回研究発表大会において、鹿谷祐子が「お伽草子『稚児今参物語』と『源氏物語』」を発表した。(http://www3.ocn.ne.jp/~bungaku/whatsnew/2011_6kenkyuhappyou.html)。

（7）市古貞次『中世小説とその周辺』（東京大学出版会、一九八一年）二六一頁。「慶長十年（中略）三月四日　児今参ノ双紙初而一見候（時慶卿記）」を参考にした。濱中修は市古の指摘を踏まえ、徳田前掲書（注3参看）において成立期を「慶長十年三月四日以前」としている。

（8）村山修一『安土桃山時代の公家と京都　西洞院時慶の日記に見る世相』（塙書房、二〇〇九年）二～三頁。

（9）前掲書三～五頁、六八頁を参照。

（10）前掲書一六四～一七二頁を参照し、村山氏の分類に基づき、私に訂補を加えた。

（11）松本隆信・横山重・編『室町時代物語大成　第九』（角川書店、一九八一年）二六五頁。奈良絵本『ちごいま』の本文・和歌は松本隆信・横山重・編『室町時代物語大成　第九』（角川書店、一九八一年）による。以下、同じ。

（12）鈴木弘道氏「とりかへばや物語の影響作品」（『平安末期物語についての研究』赤尾照文堂、一九七一年）三八二頁。

（13）松本前掲書（注11参看）二六三頁。

（14）鈴木前掲書（注12参看）三八三頁。

（15）鈴木前掲書（注12参看）三八三頁。

（16）松本隆信・編『室町物語大成　補遺二』（一九八八年、角川書店）二〇七頁。この和歌は絵巻のみに存在し、奈良絵本では削除されている。

（17）樋口芳麻呂校注『王朝物語秀歌選（下）　風葉和歌集下・源氏物語歌合』（岩波文庫、一九八九年）一六三頁。「忘ればやと憂きに幾度思へどもなほ面影の身をも離れぬ」は、巻五・二一五の和歌である。

（18）樋口前掲書（注24参看）四一八～四一九頁。

（19）宮崎裕子「散逸物語『すまひ（相撲）』復元考」（「文獻探求四九」所収、二〇一一年三月）五頁。

（20）山田和則「散逸物語『すまひ（相撲）』復元試論―「男色物」なるジャンルからの開放を目指して―」（「名古屋大学国語国文　九〇号」所収、二〇〇二年七月）二五頁。

（21）山田前掲書（注20参看）二五～二六頁。

（22）松本前掲書（注11参看）二五六～二六六頁。『新編国歌大観』において、「かりそめの」かつ「あかつき」を含む和歌は、「白河殿七百首」（第十巻所収）の一四三番詠のみであった。

草庵月　　前大納言

かりそめの草の庵りの旅枕あかつきしるき月のかげかな（一四三）

（23）三角洋一『物語の変貌』（若草書房、一九九六年）三三二頁。

（24）樋口芳麻呂・校注『王朝物語秀歌選（上）　物語二百番歌合・風葉和歌集上』（岩波文庫、一九八七年）　四一九～四二〇頁。
（25）三角洋一「散逸物語《鎌倉期》」（三谷栄一・編「体系物語文学史　第五巻　物語の系譜　鎌倉時代　二」所収、一九九一年）と、同書所収、「《付》散逸物語辞典－鎌倉時代物語編」の水無瀬川の項を参照。
（26）松本前掲書（注11参看）二五七頁。
（27）梶原正昭・山下宏明　校注『平家物語　四』（岩波文庫、一九九九年）二六～二八頁。
（28）松本前掲書（注11参看）二五八頁。
（29）『新編国歌大観』CD-ROM版を参照。
（30）『新編国歌大観』第一〇巻を参照。
（31）梶原前掲書（注27参看）二六八頁。
（32）松本前掲書（注11参看）二五八頁。
（33）松本前掲書（注11参看）二五九～二六〇頁。
（34）松本隆信・編『室町物語大成　補遺二』（角川書店、一九八八年）二二一頁。「底の水屑」はこの他、絵巻の挿し絵・第十八図の画中詞に、「五・そこのみくつとも、なりなん事を、おもひさためて、いてしか共、あやにくに、川のあたりへは、ゆかすして、此の山に、まよひはん　へりつる（二二六頁）」においても使用されている。
（35）大槻修・田淵福子・森下純昭・校訂訳注『中世王朝物語六　木幡の時雨　風につれなき』（笠間書院、一九九七年）五四～五五頁。
（36）鈴木前掲書（注12参看）第五章　とりかへばや物語の影響作品・第二節　ちごいま」を参照。
（37）CD-ROM版『新編国歌大観』を元に、「底の水屑」と「底の藻屑」の使用例を私にまとめた。「底の水屑」（底のみくづ、そこのみくづも含む）の表現が含まれていたのは三〇首であった。「川」と伴に詠まれている歌は一六首、「瀬々」は四首、「瀬」は二首、「涙」は二首、「入り江」は一首、「波」は一首であった。「涙川」は「川」と「涙」でそれぞれ数えた。「底の藻屑」（底のもくづ、そこのもくづも含む）の表現が含まれていたのは十首であった。「川」と伴に詠まれている歌は四首、「瀬」は二首、「涙」は二首、「海」は一首、「井戸」は一首、「池水」は一首、「浦」は一首であった。
（38）松本前掲書（注11参看）二六三頁。
（39）梶原前掲書（注27参看）四一四頁。
（40）梶原前掲書（注27参看）三八四頁。
（41）梶原正昭・山下宏明　校注『平家物語　三』三六〇頁。
（42）梶原前掲書（注27参看）戒文・千手前の巻を参照。
（43）岡見正雄「天狗説話展望―『天狗草子』の周辺」（『室町文学の世界』岩波書店　一九九六年、所収）一八五頁。
（44）松本前掲書（注11参看）二六八頁。
（45）片岡麻実「尼天狗の「兜率天往生」私考―『稚児今参り物語』を参考に―」（未刊）

（46）小島明子「九条家と『我が身にたどる姫君』―物語成立の環境をめぐって―」（「国語国文　七五巻一二号」所収、二〇〇六年）を参照。

（47）片岡利博『我が身にたどる姫君・下』（笠間書院、二〇一〇年）二二九頁を参照。

（48）市古貞次『中世小説の研究』（東京大学出版会、一九五五年）三八九頁を参照。

（49）松本前掲書（注11参看）二六九頁。